八ノ坪遺跡

（はちのつぼいせき）

八ノ坪遺跡は南区護藤町から美登里町に広がる遺跡です。旧白川が形成した自然堤防の先端に遺跡は立地します。

遺跡は平成 15～18 年度にかけて調査が行われ、弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が大量に出土しました。

特筆すべきものに青銅器を生産した鋳型が 6 点見つかっています。国内で青銅器の生産が始まった初期のものです。この青銅器の生産には朝鮮半島から渡って来た渡来人が関わっていると考えられています。八ノ坪遺跡では、朝鮮系無文土器と呼ばれる土器が多数出土し、渡来人の痕跡が認められます。

遺跡全景　南からみた遺跡の様子。北西の方角に、金峰山が見えます。

調査で最も多く出土したのは弥生土器です。弥生時代前期後半から中期前半が大半を占め、同時に石器も多数出土しています。土器の年代と同じと考えれます。

石器は大陸系磨製石器群と呼ばれる、弥生時代に特徴的な石器です。伐採石斧・加工用石斧と穂積み用の石包丁があり、表面を磨いて鋭利な刃部を作り出しています。このなかで伐採石斧の一部は福岡市西部にある今山で産出した玄武岩で作られています。福岡から熊本まで同じ石斧が流通していたことになります。この他、石器の特徴として、砥石の豊富さが挙げられます。驚いたのは天草産の砥石が非常に多いことです。これは金属の仕上げと手入れに必要なものです。これで、生産した青銅器を仕上げていたと考えられます。青銅器にかかわる、当時の風景が目に浮かびます。

弥生時代前期から中期の磨製石器群

多種多様な砥石　青銅器・鉄器の加工に用いられました。